

所 陵

No. 59

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



画像磚 Brick with picture (前漢 内藤コレクション)

● 目 次 ●

小祠に残る住まいの記憶・	森 隆男	2
イスラエル国 テル・アヴィヴ市 エレッツ・イスラエル博物館	山内 紀嗣	4
安藤スポーツ・食文化振興財団と「インスタントラーメン発明記念館」の運営	荒金 善一	6
国府遺跡块状耳飾装着頭骨出土状況石膏模型の実測図	山口 卓也・荒田 恵	8
京都国際マンガミュージアム	澤崎 瞳	10
早瀬の子供歌舞伎	藤岡 真衣	12
平成20年度購入資料の紹介—日本の陶磁器—		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

小祠に残る住まいの記憶

森 隆 男

1 はじめに

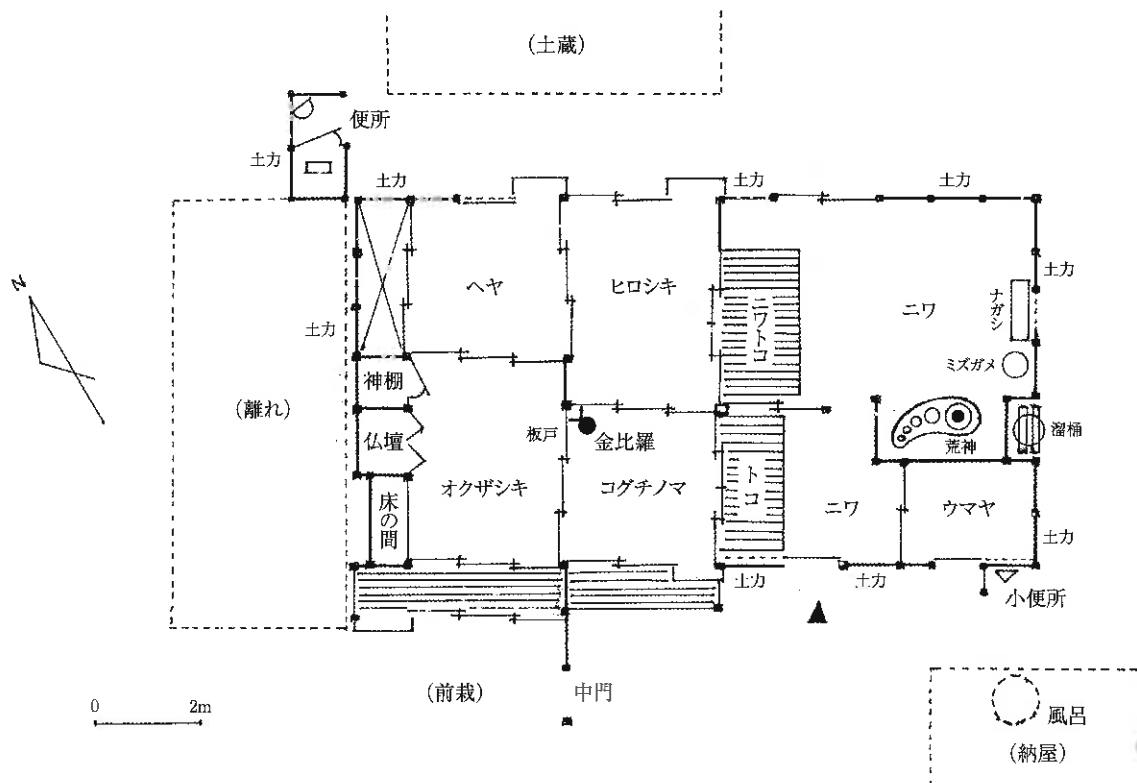
奈良県生駒市に「食違い四間取り」の古い民家が残っているとの情報を得て、学生たちと同市高山の谷村家を訪れた。当主の勲氏（1930年生まれ）によると初代が江戸時代に建てたと伝承されているということであったが、それ以上の情報はなかった。しかし、思いがけないところから嘉永7年（1854）の建築年が判明した。部屋の隅に安置した小祠の裏に上棟の年月が墨書されていたのである。

2 谷村家の概要

谷村家は、山を背にして建つ茅葺入母屋平入りの民家である。土間部分のウマヤや台所は改築されているが、ほかの部分はほとんど手が加えられていない。建具も板戸が残されているなど、全体的には建築当初の状況を伝えているといえる。

図のように土間の割合が多く、「煙返し」の奥には5穴の竈が設置されていた。ニワトコは大和や河内地方に多くみられる板敷きで、履物を履いたままそこに腰をかけて昼食を取る。ヒロシキは朝食と夕食の場であるとともに、家族がそろって団欒のときを過ごす部屋になる。ヘヤは寝室で、半間の開口部をもつ比較的閉鎖的な空間である。コグチノマとオクザシキは接客空間である。あらたまった客は奥座敷に招きいれられた。葬儀などで多くの人が集まる場合は、すべての建具を取り払って4部屋とも使用したという。

主屋の裏側には、建築当初のものと思われる大規模な土蔵が建てられている。主屋の上手には4畳半2間の離れがほぼ接して建てられているが、少し遅れて建てられたようである。また下手の前面には風呂を備えた納屋が建てられている。



谷村勲家平面図（ナガシ、かまどは復元 原図作成：裕有美子・藤田奈々）

オクザシキには造り付けの仏壇と神棚があり、祖先の霊と伊勢神宮の神、氏神などが祀られている。土間に設けられた竈の最大の穴には常に大鍋が据えられ、蓋の上に松の枝を飾っていた。三宝荒神の依り代である。ナガシの上には三宝荒神の神札が貼られていた。さらにコグチノマの隅の鴨居付近には棚が設置され、金比羅宮の神札を納めた小祠が安置されている。その前には丁寧な造作の燈籠が吊られている。

3 建築年を記した小祠と初代繁蔵

この小祠は幅16cm、奥行8.5cm、高さ25cmで、裏面に「奉上棟 嘉永七寅年 五月吉日」の墨書があり、谷村家の建築年を知ることができた。勲氏も今までこの小祠をおろしたことがなく、また金比羅宮について、当家には伝承がない。誰が何のためにこの小祠を安置したのであろうか。

この小祠が安置されている場所はコグチノマであるが、図のように4部屋のほぼ中央に位置することになる。上棟の日を墨書している点から、金比羅の神は住まいの守護神として勧請されたと考えらるべきであろう。ちなみに祠の中には3枚の神札が納められており、最新の神札にのみ明治24年12月の日付が刷られているが、あとの2枚は近世末期から明治にかけて版木で刷られたものである。

また仏壇の中に、初代から書き継がれた当家の歴史を記した書付が残されていた。これによると、初代繁蔵は文政9年（1826）に生まれ、明治22年に死去している。当家の住まいは初代繁蔵が28歳のときに建築したとみてよからう。彼はその後、慶応2年（1866）には領主の旗本森家の年寄役を仰せ付けられ、明治5年に副戸長、その後は教育関係の責任者を歴任し、近世末期から近代にかけて高山地区のリーダーとして活躍したようである。

以上のように、コグチノマに祀られた金比羅宮は谷村家の初代繁蔵が住まいの守護神として勧請し、以後も代々祀り継がれてきたことがわかる。

4 金比羅宮の神に期待されたもの

谷村家が建築された嘉永7年には、ペリーが再び来航して日米和親条約が締結された。この

ような情報は和の農村で若くして初代当主になった繁蔵の元にも届いていたはずで、金比羅宮の神を勧請して小祠の裏に記した墨書に、激動の時代にあって住まいと「家」を守ろうとする彼の強い意思をみることができよう。

また民家の建築年は、棟札を残すことがまれで、新築に関わる記録「普請帳」が残されていることもあるが、ほとんどの事例で不明である。この地域において民家の編年の作業を進める上で、建築年が判明した谷村家の事例が重要な基準になるとと思われる。



写真1 谷村勲家主屋



写真2 金比羅の小祠と吊り灯籠



写真3 小祠裏の墨書

イスラエル国 テル・アヴィヴ市 エレッツ・イスラエル博物館

山 内 紀 嗣

イスラエル国テル・アヴィヴ市にエレッツ・イスラエル博物館がある。エレッツ・イスラエルとは「イスラエルの地」という意味である。1953年の創設である。

地中海に面したテル・アヴィヴはイスラエル第一の都市であるが、1948年の建国まではただの海岸砂丘であった。テル・アヴィヴ市の南には古くからの港町であるジャッファ港がある。この港はかつては地中海でも有数の町で、港の東に隣接して前期青銅器時代から現代まで続くテル・ジャッファ遺跡がある。日本へもジャッファオレンジやスウィーティーなどの果物の輸出があり、有名である。その港町の北側に第2次大戦後、シオニズムに燃えて帰国した人々が新たに街路を設け、町を作ったのである。ちなみにテル・アヴィヴとは「春の丘」という意味である。



荒れ果てた遺跡

テル・アヴィヴ市の北には東から流れてきたヤルコン川があり、海岸から川を東へ約1.5km遡った北岸にはテル・カシーレ遺跡が位置する。博物館はこの遺跡を取り込むように12haもある広い敷地を持っている。博物館の建物は通常に見られる大規模な建物は無く、いくつかの部門に分かれて敷地内に配置されている。また、テル・カシーレ遺跡に隣接しているところから、発掘された区域について修復・保存が部分的になされており、見学できるようになっている。



博物館入口

博物館の展示施設はガラス館、コイン館、郵便史・切手館、陶器館、青銅館、民族・民俗館、プラネタリウムに分かれている。各建物は敷地内に分散しており、観覧者は自由に見学できる。また、職人アーケードと称して、古代の人々の「ものづくり」の様子を実際に見ることのできる通りを復元した建物もある。以下、そのうちのいくつかについての概要を説明する。博物館を訪れたのはこれで5度目であるが、今回は2009年8月30日に見学した。

ガラス館 この建物ではガラスの始まりから現代のガラス工芸品まで、年代を追って順に展示している。特にローマからビザンチン時代にかけての製品には見るべきものがある。また、古代ガラスの製造遺構が復元されたコーナーもある。こうした博物館では通常考古学的な展示に終始してしまいがちであるが、ガラスが現代にどのように使用され、現代美術にも貢献しているということを展示している。

コイン館 ここでは古代の銭貨を中心に約8万点のコインが収蔵されている。コインの始まりはギリシャ領であったアナトリアのリディアであり、それは紀元前7世紀のものである。また、見学時は中国の銭貨についての特別展示がおこなわれており、銭貨以前の子安貝のものから、清代の枝銭まで見る事ができた。

郵便史・切手館 この建物の1階はイスラエルにおける郵便と切手、電話、また郵便を運搬するための鉄道に関する展示などが行われている。見学時にはトルコ時代にダマスカスからサ

ウディアラビアのメッカまで敷設予定であった路線の写真展示が行われており、線路に敷く枕木（鉄製）と同じものが私たちが発掘調査したエン・ゲヴ遺跡で出土したのを思い出した。エン・ゲヴ遺跡では、第3次中東戦争（1967年）で使用された塹壕から出土したのである。

この建物の地下1階は企画展示室に使用されているが、今回は「テル・アヴィヴ2万年展」が開催されていた。旧石器時代から現在までのこの地域の考古学的な資料と近代以降については写真を用いて説明されていた。但し、全てヘブライ語のみで説明されていたのは残念であった。

青銅館 建物を入るとまず、人工洞穴の空洞が現れる。これはイスラエル南部にあるティムナ遺跡の銅鉱山跡内部の模型である。後期青銅器時代、この地域はエジプトの支配下にあり、エジプト風の神殿が作られ、エジプトの土器などが出土している。とりわけ銅の精錬の様子がわかるように模型を用いて展示しているほか、青銅製品、銅鉱石、轡の羽口、銅滓、インゴットなども並べられ興味深い内容となっている。

焼物館 ここではイスラエルの銅石時代からの土器が時代を追って展示されているほか、古代イスラエルの土器に影響を与えたギリシャ、キプロスなどの土器も展示されている。また、土器だけではなく焼物で作られた神殿のミニチュアや人形棺、土人形など葬送や祭祀に用いられたものも多い。さらに現代のアフリカにおける土器制作・焼成の様子を撮影した写真、実物も展示されており、焼物に興味を持つ者にとっては参考になるコーナーもある。



焼物館内部

職人アーケード この建物は内部を昔の町の街路のようにみだてて店舗が設けられている。街路の両側には10数軒のそれぞれ異なった工房が入っている。例えば織物、革製品、鍛冶屋、宝飾製

品、ガラス工房、糸作り、馬具作りなど各種の物を実際に製作して見せることができるようになっている。訪れた折りには季節柄、製作は行われておらず製品だけが置いてあった。時折実演があるようである。一般的な博物館ではなかなか難しい事である。



職人アーケード

この外、イスラエルの宗教・信仰的な物を中心に展示した民族・民俗館、講演会などを催すオウディトリウムやオリーブ油を絞るための道具を展示した建物、ユダヤ人の富豪であるロスチャイルド家によって建てられたロッシールドセンターなどがある。また、子供を中心にワークショップを行う学習センターが分かれて建つ。さらにミュージアムショップも充実している。ある意味エルサレムにあるイスラエル博物館より利用し易く分かりやすい展示施設と言っ

て良いだろう。一般にイスラエルでは旧約聖書を中心にした歴史教育が整っており、各地の博物館では展示ケースの前に皆で座り込み、実物を見ながら先生の話を聞き、質問をするということが多くなされている。日本では他の観覧者に迷惑だからということでそういうことはなされないが、観覧者の少ない施設などでは行なってもいいのではないかと思う。我が国より子供の活用率が高く、日本の博物館も見習うことが多い。

日～木曜日は午前9時～午後4時

金曜日は午前9時～午後1時

土曜日・祝祭日は午前10時～午後2時

大人38シェケル、学生・子供26シェケル（1シェケルは約25円） 土曜日・日曜日は無料

2Haim Levanon St., Ramat Aviv Tel Aviv 69975

www.erezmuseum.org.il Tel. 03-6415244

天理大学附属天理参考館学芸員

安藤スポーツ・食文化振興財団と 「インスタントラーメン発明記念館」の運営

荒 金 善 一

1. はじめに

ちょうど30年前、私は関西大学文学部史学科に在籍し日本史を専攻、そして「博物館学課程」を履修していた。また、山歩きや自然が好きで、体育会ワンダーフォーゲル部にも所属し、充実した4年間を過ごした。

そして1980年、大学卒業後は、「食」に関わる仕事に携わりたいと思い、日清食品（株）に入社した。以来20数年にわたる営業部門や総務部門での勤務を経験して、2007年秋から（財）安藤スポーツ・食文化振興財団（以下、安藤財団）に異動、財団事務局があるインスタントラーメン発明記念館（大阪府池田市）で勤務している。

2. 安藤スポーツ・食文化振興財団

日清食品創業者である安藤百福（1910年～2007年）は、1958年に世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を発明し、その後1971年に世界初のカップ麺「カップヌードル」を発明するなど、世界の食文化に革新をもたらした。



安藤百福

安藤財団は、日清食品が創業25周年を迎えた1983年に、安藤百福が私財を投じて設立された財団法人である。「食とスポーツは健康を支える両輪である」という理念のもと、青少年の健全な育成を願い、次の4つの事業活動を行っている。

①陸上競技活動の支援

「全国小学生陸上競技交流大会」や「全国小学生クロスカントリーリレー研修大会」などの後援。（オリンピックや世界選手権でメダルを獲得する選手を輩出し、日本陸上競技界の底辺拡大に貢献）

②自然体験活動の支援

・「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の実施。（学校、一般団体が企画する自然体

験活動を支援・表彰）

- ・2010年春「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」（長野県小諸市）設立予定。（上級指導者の育成と指導カリキュラムの研究・開発を行う日本初の専門施設）

③食文化振興活動

食創会～新しい食品の創造・開発を奨める会～「安藤百福賞」表彰事業。（新しい食品の開発に貢献する独創的な基礎研究者、開発者、ベンチャー起業家を支援）

④インスタントラーメン発明記念館の運営

3. インスタントラーメン発明記念館

(1) 設立趣旨

1999年11月オープン。2004年11月に拡張新築し、設備・展示を一層充実した。新しい食文化となったインスタントラーメンの歴史を通じて、発明・発見の大切さを伝え、ベンチャー・スピリットを応援する体験型食育ミュージアム。昨年9月、開館から約9年で来館者200万人を達成した。



インスタントラーメン発明記念館 外観

(2) 展示構成

◇チキンラーメンの誕生

「チキンラーメン」を開発した安藤百福の研究小屋。1958年当時の様子を緻密な時代考証によって再現



研究小屋

し、開発のエピソードを分かりやすく解説している。

◇安藤百福とインスタントラーメン物語

安藤百福の足跡とインスタントラーメンの歴史、知的財産の大切さなどを、年代順にグラフィカルに展示。壁面のハンドルを回したり、扉を開けたりと楽しみながら見ることができる。

◇カップヌードル・ドラマシアター

カップヌードル型の体感シアター。

「カップヌードル」の発明にいたるひらめきのエピソードや製造工程などを、アニメーションとCGで紹介。(上映時間13分)

◇世界のインスタントラーメン展示

今や全世界で、年間1,000億食近く消費されるまでの世界食に成長したインスタントラーメンの実物パッケージを展示。それぞれの国に合わせて味や中身に違いがある。隣りのコーナーでは、日清食品がJAXA（宇宙航空研究開発機構）と共同で開発した宇宙食ラーメン「スペース・ラム」を展示中。

◇インスタントラーメン・トンネル

日清食品の歴代の主な製品パッケージ約800種類を頭上におおいかぶさるボリュームで展示。インスタントラーメンの発展を系統立てて表現している。



インスタントラーメン・トンネル

(3) 体験工房

◇チキンラーメン手作り体験工房

「チキンラーメン」を手作りできる、世界で唯一の工房。小麦粉をこね、のばし、蒸したあとに味付けをし、「瞬間油熱乾



チキンラーメン手作り体験

燥法」で乾燥するまでの工程を楽しむ。

(要予約・有料)

◇マイカップヌードル・ファクトリー

自由にカップをデザインして、スープを選び、好きな具材をトッピング。世界でひとつだけのオリジナル「カップヌードル」を作る。「逆転の発想」の大切さを体感する。

(予約不要・有料)

4. 学校教育との連携

安藤財団では、「自然とのふれあいが、子どもたちの創造力やチャレンジ精神を豊かにする」との創設者の考えから、財団設立当初から自然体験活動の支援、普及に取り組み、子どもたちの「創造力」や「自活力」を育んできた。

また、1999年11月、インスタントラーメンの歴史を通じて、「発明・発見の大切さを伝えたい」という願いから、インスタントラーメン発祥の地・池田市に『インスタントラーメン発明記念館』がオープンし、今年で開館10周年を迎える。

展示見学やシアターを通して、インスタントラーメン開発のエピソードや歴史を学び、また2つの体験工房での実体験を通じ、『新しい食文化の創造』を体感してもらって、子どもたちの自由な発想と豊かな創造力を育てたいと考えている。

昨年は、国内、海外から47万人の来館者があったが、楽しみながら学べる「食育」施設として、小・中学生の課外学習や総合学習等の一環で、多くの児童、生徒たちを迎えている。

安藤財団では、今後も子どもたちの心身の健全な育成のための事業と食文化の向上に貢献する事業の充実につとめる所存である。

【インスタントラーメン発明記念館】

(The Momofuku Ando Instant Ramen Museum)

所在地：〒563-0041 大阪府池田市満寿美町8-25

最寄駅：阪急電鉄宝塚線「池田」駅下車、徒歩5分

開館時間：9時30分～16時

休館日：火曜日（祝日の場合は翌日が休館）、
年末年始

入館料：無料（体験工房は有料）

HPアドレス：<http://www.nissin-noodles.com>

案内ダイヤル：(072) 752-3484

財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 事務局 次長

国府遺跡玦状耳飾装着頭骨 出土状況石膏模型の実測図

山口 卓也 荒田 恵

大阪府藤井寺市国府遺跡は、縄文時代前期の墓地で多数の埋葬人骨が出土した遺跡である。発見された埋葬人骨に玦状の石製品が伴ったことから、それらが耳飾であることが判明し、東アジアの玉文化研究の大きな画期となった。

関西大学博物館の本山コレクションには、国府遺跡資料があり、頭骨に接して発掘された3組6点の玦状耳飾がある。このうちの一組は、大正6年の大串菊太郎氏第3次調査の第4号人骨（完存、壮年女性、仰臥屈葬）にともなって発見されたもので（図1）、本山番号328として登録されている（図2）。同番号には、付属として「同出土原状模型」とされる玦状耳飾を装着した頭骨の出土状況を石膏で型取りした模型（図3）がある。発掘時に作成された石膏模型は、経年による乾燥劣化で崩壊する危険があるので、樹脂製の複製を作成して玦状耳飾とともに展示している。今回さらに実測図を作成したので紹介したい。



図1 頭骨の出土
（末永雅雄1935『本山考古室要録』200pより）

1 大正6年10月1日からの第3次調査10日間の3日目にこの第4号人骨が発掘され、頭骨に玦状耳飾が装着されている状況が把握された。この頭骨と玦状耳飾の位置関係から、玦状耳飾が耳朶に穿孔して貫入装着する一種のピアスであることがはじめて解明された。調査担当者はその重要性を考え、現地で頭骨を取り上げる前に速やかに出土状況を型取りして玦状耳飾装着頭骨出土状況石膏模型を作成したと推測で

きる。図1と石膏模型から読み取れるように、頭骨と玦状耳飾は慎重に露出されており、耳飾はしっかり検出面に張り付いている。

大正6年当時の素材状況から、「こんにゃく」の粉末を溶いて流し込み、型取りしたと伝えられる。石膏模型は、頭骨から型を剥がして反転し、石膏を流し込んだ際に支型がなかったのか、流し込んだ石膏の重量で変形して頭頂部から後頭部が大きく膨張して俵型となり、丸いはずの人間の頭骨が変形している。

玦状耳飾も検出面に密着して浮き上がりはないが、検出面は水平ではない。左耳の耳飾の弧が頭骨側に、切込みが外を向いていることがくっきりとみえる。右耳は、破損した玦状耳飾が、切り込み側を外にして露出しているのがみてとれる。

実測図作成では、発掘時写真（図1）とつぎ合わせて作図したが、頭骨と玦状耳飾の位置関係がはっきりと読み取れる。石膏模型であるため、色調による頭骨と土壌の部分の区別が難しく、模型の骨と土の表面状態で区別したので、実測図の頭骨形状は完全でない可能性がある（図4）。



図2 玦状耳飾

2 発掘記録を連載した大阪毎日新聞紙上（大正6年10月15日～31日）には、石膏模型を作成したという記録は見当たらず、発掘調査報告書も作成されなかったことから、この石膏模型を誰が作成したのかは明確ではない。特に新聞記事にされなかったことから、毎日新聞社長で

ある本山氏や現場作業を指揮して記事を書いた岩井雍南氏であるとは考えにくい。

発掘現場で速やかに型取り複製を行った人物は、瞬時に考古学的に重要な発見であるということ判断できる人物であったと推理できる。国府遺跡の本山彦一による発掘調査は、京都大学考古学教室の浜田耕作教授など学会の権威が支援、学問的裏づけを付与して行われ、大阪医科大学の大串菊太郎教授以下、「青年考古学者」田澤金吾氏、道明寺の南坊城良興氏など各界からの参加があった。

このなかで、学問的な判断を下せる浜田、大串両氏の関与がまず考えられる。考古学的な判断は浜田氏が、石膏模型作成については大串氏が関与した可能性がある。洋行経験がある浜田氏からは欧米の学術標本作成方法と展示についての知見が、大串氏からは石膏を用いた化石骨などの複製技術が、作成にあたって反映されているのではなかろうか。

頭部のみが作成され、身体部分の出土状況が複製範囲から除外されてしまったことは残念であるが、現場で速やかに行う必要のあった当時の状況から、やむをえなかったと推測される。

3 玦状耳飾は、中国、ロシア極東地方、日本海を挟んだ日本列島に広く分布する先史考古学研究上重要な遺物である。今のところ日本列島では、埋葬人骨頭部に玦状耳飾が耳朶の位置に伴う遺存例は、国府遺跡例以外に発見されてい



図3 石膏模型（劣化した石膏模型と樹脂複製）

ない。大正年間に、この唯一初めての発見という機会を捉え、確かな技術で石膏模型としたことは、日本考古学史上の快挙であるといえるだろう。

人類学、考古学の連携の下に、玦状耳飾の出土状況を、文章でなく、写真でも実測図でもなく、92年前、おそらく最も早く出土状況を石膏模型にし、眼前で確認できるこの事例は、関西大学博物館の展示室で、この石製品が耳飾であると今も雄弁に語ってくれている。

山口卓也：関西大学博物館学芸員

荒田 恵：総合研究大学院大学博士課程在学



図4 石膏模型実測図

京都国際マンガミュージアム

澤 崎 瞳

私はいま、京都国際マンガミュージアム内にあるミュージアムショップに、アルバイト店員として勤務している。以前から、博物館で働きたいと思い、色々な求人情報誌などをチェックしていたのだが、たまたま訪れたこのミュージアムでアルバイト募集の張り紙を見て応募し、採用となった。ミュージアムショップ内での販売業務が主な仕事内容であるが、一日の大半を館内で過ごすうち、このミュージアムが他の博物館や美術館と異なる点を多く持っていることが分かったので、その内容について記したいと思う。

京都国際マンガミュージアムは、2006年11月25日、国内外のマンガに関する資料を集める日本初の総合的なマンガミュージアムとして開館した。明治期以降のマンガ関連歴史資料や貸本、世界各国のマンガ本、雑誌、アニメーション関連資料など約30万点の資料を所蔵している。もともとは、マンガ学部をもつ京都精華大学と、土地・建物を提供した京都市による共同事業として設置が進められ、今は市と大学が組織した運営委員会のもと、大学側が主な管理と運営を担当している。建物は、1995年に廃校になった旧龍池小学校の校舎を改築して利用している。

マンガミュージアム開設のコンセプトは、マンガ・アニメーションを体系的に研究し、生涯学習、観光誘致、人材育成や新産業創出等への活用を図るための資料の収集・展示・保存を市と大学が共同で行い、その成果を地域社会の文化活動に対しても還元・貢献できる形態を作ることである。開館後一年間の入館者数は、当初の予想を大きく上回り、22万7千人に達した。そのうち3万人は外国人観光客が占めている。

このミュージアム一番の見どころは、総延長140メートルの書架に約4万冊のマンガが並ぶ「マンガの壁」だろう。ここに収められているマンガは、そのほとんどが2005年まで約20年間営業されていた貸本屋「大久保ネギシ書店」

から寄贈されたものである。廊下にずらっと並ぶ本棚と、そこに収められているマンガを初めて見たとき、その量と存在感に圧倒された。入館者はこれらの本を好きな場所で好きなだけ読むことができ、また一度入館チケットを購入すれば、当日中なら何度でも出入り可能となっている。

マンガだけではなく、絵本を多く所蔵しているという点も、特徴の一つとしてあげることができる。館内には、「こども図書館」があり、中には子供向けのマンガと絵本が多く集められている。ここでも、好きな本を手にとって、思い思いの場所で本を読む子供を、多く見ることができる。

入り口近くにあるインフォメーションカウンターには、日本語以外にも英語、中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語などのパンフレットも常備されている。さらに、さまざまな国の言葉に翻訳された日本のマンガも所蔵されており、ここを訪れる外国人観光客の多さがうかがえる。

マンガに関連したテーマでのワークショップが毎週開催されていることも、訪れる人が多い理由の一つに挙げられるだろう。土・日・



子ども図書館の様子

祝日のみ開催のワークショップでは、「作画体験」や「彩色体験」、「マンガ家アシスタント体験」など利用者参加型イベントが開催される。自分で絵を描いたり、物語を作ったり、声に出して読んでみたり。このワークショップでは、

マンガを作る現場に参加する、という体験を通して、ものを作るとはどういうことを学ぶことができるのである。他にも、京都精華大学マンガ学部の卒業生による、マンガの描き方実演コーナーもあり、ただマンガを読むだけでなく、様々な角度からマンガについて知ることができる。

さらに、コスプレイベント「COSJOY」を定期的で開催している点も、マンガミュージアムのユニークな取り組みの一つである。マンガやゲームのキャラクターの格好をして、その人物になりきった参加者が館内にあふれかえる光景は、見ていてとても楽しい。この日は館内の職員やミュージアムショップの店員も、白雪姫や鬼太郎や蔵馬や黒執事に変身して職務に就いている。利用者だけでなく、そこで働いている人たちも参加して楽しむイベントなのである。

また、ミュージアム内に設置された京都精華大学の「国際マンガセンター」では、マンガを使った様々な研究活動も行っている。マンガ資料の体系的な収集とデータの整備を行うと共に、これからのマンガ文化を担う研究者や専門家の養成拠点としての役割も果たしており、そこでの研究成果は、ミュージアム内で定期的開催される特別展で発表されている。さらに、インターンシップの受け入れや、博物館実習生の受け入れなどを通して、学芸員や司書の育成も行っているのである。

平日でも多くの来館者が訪れるこのミュージアムからは、利用者のくつろいだ雰囲気が伝わってくる。館内の本は、施設内であればどの場所でも読むことができるので、天気の良い日は、屋外の芝生の上で、寝転んだり胡坐をかいたりしながら、マンガの世界に没頭している人であふれている。



中庭で本を読む人たち

特に貸し出し手続きなどは必要ないので、読みたいマンガがあれば、何冊でも持ち出すことができる所も、自由な雰囲気を作り出している理由の一つであろう。子供のころ読んだ『王家の紋章』を読み返しているお母さんの隣で、『ONE PIECE』を読む子供や、友人同士で来館し黙々と『ガラスの仮面』を読みふけり、時々感想などを伝えあいながら、また本の世界に入り込んでいくグループ、デート中に来たカップルは、お互い好きなマンガを紹介しあいながら、一緒に読んだりしている。ミュージアムが所蔵しているものを、利用者が直接手に取り、好きな様に見たり感想を伝えあったりしている光景が、いつも館内に生まれているのである。

博物館というと、少し堅苦しい雰囲気を感じ、家族や友人同士で遊びに出かける場所として選ぶ人は少ないように思う。しかし、このミュージアムでは、年間パスポートを購入し、一年に何度も訪れる人も多い。その理由は、好きなマンガを好きな場所で読めるという自由な雰囲気や、マンガという身近なものを使った展示や企画展などを通して、様々なことを学べるという発見があるからではないだろうか。

さらに、ここにあるミュージアムショップの品ぞろえも、マンガミュージアムらしいものが多い。特別展関連のグッズのほかに、英語で書かれたマンガの描き方本や、英訳されたマンガ、マンガに関する学術書などが、多く取りそろえられている。



ミュージアムショップ

【京都国際マンガミュージアム】

〒604-0846 京都市中京区烏丸通御池上ル西側
Tel 075-254-7414

関西大学大学院文学研究科博士課程 後期課程 在学

早瀬の子供歌舞伎

藤岡真衣

最初に目にした村芝居は、江戸時代から続けられてきた香川県小豆島の肥土山歌舞伎であった。村の人びとが、顔に白粉を塗ってきらびやかな衣裳を身にまとい、茅葺きの歌舞伎舞台の上で額に汗をにじませながら芝居に没頭する姿が、とても印象に残った。ほかの地域でも、祭礼の中で歌舞伎が上演されていることがわかってくると、村落へ歌舞伎がどのように伝わり、定着していったのかということに関心を持つようになった。今回訪れた福井県三方郡美浜町早瀬も、江戸時代から村の人びとによって歌舞伎が演じられている地域である。

美浜町は福井県の若狭地方にあり、若狭湾に面した町である。大阪から美浜までは、電車で約2時間半。JR湖西線を北上し、敦賀まで出て、小浜線に乗り換えて一路西へ向かい、美浜駅に着くとバスで西北をめざす。早瀬は三方五湖の一つである久々子湖北部に位置し、中世以来漁業が盛んな土地である。



久々子湖に臨む

子供歌舞伎が奉納される日吉神社は、早瀬地区の北部に鎮座する。5月5日、午前中から例大祭が始まり、神事が行われた後、神社下の山車の上で子供による寿式三番叟が奉納される。その後、山車は、瑞林寺および浄妙寺門前、代祝子（祭礼全体を運営する者）宅前、当番町、町内をまわり、各所で三番叟を上演する。三番叟は、三人で演じる祝儀の舞である。三番叟が舞い終わると、見物する人びとから山車に向け



寿式三番叟の上演
(瑞林寺門前)

て、おひねりが飛び、演じた子供にも笑みがこぼれる。木造の山車は、安政4年（1857）の建造とされ、高さ約7メートル、幅2メートル、奥行5メートルである。

このように山車の上で三番叟や歌舞伎を奉納する例は、滋賀県の長浜や岐阜県の垂井などにもみられる。長浜の曳山祭は、早瀬の歌舞伎に大きな影響を与えたと考えられている。

寿式三番叟の演じ手について地元の方に尋ねると、翁役は小学校低学年、三番叟役2人は高学年の子供が出演するのだという。かつて、出演する子供は当番町から出されたが、今では人数が足りない場合、他の町からも出演している。現在の早瀬では、三番叟のみ奉納されている。大正期頃までは三番叟のほか芝居も行われたが、昭和42年（1967）ごろには三番叟だけになった。その後一時中断した時期もあったが、昭和56年に三番叟が復活され、平成9年（1997）には町の無形民俗文化財に指定された。

早瀬の歌舞伎奉納の由来については、次の

ような伝承がある。安政3年(1856)に、コレラが流行した際、瑞林寺の住職が、疫病の蔓延は神仏の祟りであり、人身御供として子供歌舞伎を奉納せよとの託宣を受けた。そのため、村で山車を建造し、翌安政4年5月8日、寺社で子供歌舞伎を奉納すると、コレラの流行がおさまったという。

このような伝承とは別に、江戸時代後半の史料からも、早瀬における歌舞伎と祭礼について知ることができる。ひとつは文政元年(1818)の「村中申合儉約定之事(神事法事等諸参会ニ付)」(早瀬区有文書)、もうひとつは安政4年(1857)「安政四歳三方郡梅湖拜 山王宮初申祭 曳山山蔵新調之日記」(同文書)である。

これらの文書には、祭礼の創始が記されている。文政期の文書によると、祭礼は「安永九子年相始り候」とし、安政期の文書にも「安永年中より山を調へ祭礼仕候也」とある。このことから、祭礼の創始期は安永期にさかのぼる可能性が高い。

歌舞伎と祭礼の関係については、文政期の文書ではすでに「曳やま」「舞子」「ねり子」の言葉がみられるが、「舞子」が歌舞伎の演者であったかどうかは不明である。一方、安政期の文書には、疫病のため芝居を行うようになったことが記され、前述の伝承と類似する内容がみられる。安政期の文書で注目すべきことは、安政4年の時点で、すでに芝居を上演する場所が、古くからの決まりで厳格に定められていたことである。その場所は、現在の山車の巡行場所とほとんど変わらない。つまり、安政4年以前から、芝居は山車で上演されていたことが考えられる。

文書から、文政元年時点では曳山を用いた祭礼が確실히行われていたこと、そして安政4年時点には芝居が上演されていたことなど、江戸時代の早瀬の祭礼と歌舞伎の様子がうかがわれる。

早瀬の歌舞伎上演には、村人以外に、他の地域の人びともかかわっている。昭和40年代ごろまでは京都・長浜・福知山・宮津などから専門の衣裳屋・化粧師を早瀬に招き、昭和50年までは、演目に合わせて京都・滋賀から役者を呼び、指導を依頼していた。三番叟だけを奉納するようになった昭和55年から平成元年ごろ

までは、歌舞伎役者・尾上多美十郎氏^{おのゑ たみじゅうろう}が中心となって指導にあたった。尾上多美十郎氏は明治生まれの、丹後宮津の出身で、村芝居の役者だったが、昭和4年(1929)から早瀬の子供歌舞伎の指導を依頼され、昭和8年(1933)には早瀬に移り住んだ。尾上氏は、演目ごとに別の役者を呼びよせたり衣裳の手配も引きうけた。

このように早瀬の子供歌舞伎は、地元の人びとの熱意とともに、周辺地域の人びとが深くかかわることによって今日まで続いている。若狭地方には山車の上で子供歌舞伎が上演されていた例が各所にもあったが、現在でも行われているのは早瀬だけになっており、貴重な事例である。

※最後になりましたが、早瀬の子供歌舞伎について、資料をご提供して下さるとともに、ご教示いただきました美浜町教育委員会の成田かおる氏に心から感謝を申し上げます。

〈参考文献〉

- ・『広報 みはま No.228』美浜町、1989年11月
- ・美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌〈美浜の文化〉第7巻 記す・遺す』美浜町、2007年
- ・美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌〈美浜の文化〉第4巻 舞う・踊る』美浜町、2008年



翁と三番叟

関西大学大学院文学研究科博士課程 後期課程 在学
なにわ・大阪文化遺産学研究センター 研究員

平成20年度購入資料の紹介

—日本の陶磁器—

平成20年度、陶磁器の蒐集を続けた。当館は中国、朝鮮、日本の陶磁器の系統的蒐集を意図しているが、今回は日本の陶磁器を購入した。陶磁様式の伝播や消長を視野に入れて、古曾部焼や鹿背山焼など地方窯のものも蒐集の対象とした。

1は、文政10年2月の箱書きのある古曾部焼紅葉小皿20枚組の1枚欠19枚で、初代窯主五十嵐新平の晩年のものか。内面を白釉薬とし、三つ紅葉を描く。

2は、古曾部焼三島写飯茶碗5膳で、三代目窯主以降に盛んになる三島写の良品である。

3は、古曾部焼伊羅保焼写茶碗1膳で、明治になって伊香保焼を写した茶碗である。

古曾部焼は、大阪府高槻市古曾部町に、18世紀末から明治末年まで存続した地方小窯であった。初期には京焼を写し、二・三代目からは高取、唐津、高麗、南蛮、三島写し、絵高麗写しが盛んになった。江戸末期には「くらわんか」茶碗も生産されている。需要に応えるため、柔軟にさまざまな写しを行った地方窯の作品群である。



1. 古曾部焼紅葉小皿



2. 古曾部焼三島写飯茶碗



3. 古曾部焼伊羅保焼写茶碗

4は、鹿背山焼染付竹林七賢急須で、江戸時代後半の作品であるが、七賢の姿が西洋風にデフォルメされている。

5は、鹿背山焼染付扇面ちらし蓋物で、江戸時代後半の作品である。

6は、鹿背山焼印判染付鉢で、絵付けを転写した江戸時代末から明治の作品である。

鹿背山焼は、京都府相楽郡木津町鹿背山にあった地方窯で、江戸時代後半から明治前半頃まで存続した。白磁染付けを生産し、各地の輸出染付陶器を写すことを得意とし、中国景德鎮の祥瑞手写でも知られる。

7は、赤膚焼白釉俵形茶碗で、茶器としてすぐれる。江戸時代後半の作品である。

8は、赤膚焼白釉カンナベ（銚子）一対である。江戸時代後半の作品である。

赤膚焼は、奈良県奈良市五条町にある窯群で江戸中期に活発になり、後期には濁白色の萩釉を郡山の数寄者奥田木白が導入し、遠州七窯の一つとなった。

9は、古清水焼色絵椿文銚子で、紺で枝葉、緑で椿を太い筆はこびで描く。全体に貫入が現れ、茶渋の浸透で古色をおびている。江戸時代後半の作品である。

10は、古清水焼色絵菊慈童香炉で、軍配を持った子供が柄杓のおかれた水がめにもたれている姿をしている。水がめが香炉となり、足袋は白、着物は白釉の上に緑と青、金で絵付けす

る豪華な仕上げで、江戸時代後半の作品である。
(山口)



7. 赤膚焼白釉俵形茶碗



8. 赤膚焼白釉カンナベ（銚子）一対



9. 古清水焼色絵椿文銚子



4. 鹿背山焼竹林七賢急須



5. 鹿背山焼染付扇面ちらし蓋物



6. 鹿背山焼印判染付鉢



10. 古清水焼色絵菊慈童香炉（正面・背面）

◆ 博物館だより

◇平成21年度春季企画展「浪速の絵師 菅楯彦の画業」を4月1日から5月17日まで開催し、2,551名のかたにご見学いただくことができました。ご観覧いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。会期中に、新型コロナウイルスが国内で発症し、会期の短縮を余儀なくされましたが、浪速・大阪を代表する大和絵の大家 菅楯彦の初期の大作「職業婦人繪巻」を本館で公開することができましたことは、大変意義深いことと感じています。4月25日には、芦屋市立美術博物館の明尾圭造先生の解説を聞きながら、14mの繪巻全幅を開陳いたしました。講演会と併せて38名の方がたにご覧いただくことができました。



◇平成21年度ミュージアム講座の開催

7月11日から毎土曜日に「関西大学ミュージアム講座」を開催しました。総合テーマを「なにわの文化遺産(四)」として、のべ60名の受講者がありました。

7月11日「近世大阪の建築」

環境都市工学部准教授 橋寺 知子

7月18日「北村兼子とその時代―世界にはばたいた女性ジャーナリスト―」

文学部教授 大谷 渡

7月25日「近代大阪の文学」

文学部教授 増田 周子

◇高松塚古墳壁画再現展示室を使った体験学習を、文学部 米田文孝教授の指導のもとで行いました。8月1日、「飛鳥・高松塚古墳の謎～壁画の意義と歴史的背景を知ろう～」をテーマに、参加した中学生15名は、高松塚古墳石室模型を大学院生と組み立てたり、飛鳥美人や青龍の塗り絵をしたりと、参加者全員でわいわいと話をしながら、古代の技術や思想を楽しく学ぶことができました。

◇平成21年度博物館なんでも相談会を8月4日と5日に実施しました。今年で7回目となるこの行事は、学芸員を目指す学生たちの実践実習の場でもあり、総勢19名の学生がスタッフとして参加し行事を盛り上げてくれました。また、関西大学第一高等学校から3名のインターンシップ実習生も加わり、これまで以上の賑わいとなりました。相談会には2日間でのべ829人の参加がありました。



・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

『肝陵』第59号をお届けいたします。今号は、森先生を巻頭に、天理大学附属天理参考館の山内先生、安藤スポーツ・食文化振興財団の荒金さん、文学研究科博士課程 澤崎さんにご寄稿いただきました。また、なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員の藤岡、本館学芸員の山口と学芸補助の荒田からも報告をあげております。ご執筆くださいました皆様方に感謝申し上げます。

2011年に関西大学博物館学課程創設50周年を迎えます。その準備のために、昭和36年以來の博物館実習履修生約2500名にアンケート調査を実施しました。回答いただいたアンケートには、それぞれの授業の思い出がぎっしりとつまっており、伝統の重みを感じています。

表紙写真は、中国前漢時代の画像磚(がぞうせん)です。中国漢代の墓室は、塋(せん)と呼ばれる一種の煉瓦で築かれていることが多く、その壁面の一つ一つの塋にほどこした浮彫文を組み合わせることで、大きな画面を展開させている例がみられます。本例は、御者と戦士を乗せる傘のついた戦車や、槍をもつ兵士、門衛などが描かれており、おそらく凱旋の一場面を描いたものかと思われます。

博物館へのお問い合わせ用Emailアドレスが変わりました。hakubutsukan@mlkandai.jpです。